

英語を「知識の箱」に閉じ込めず my English を育てよう



田中茂範

「英語」について生徒はどう考えているだろうか。英語は使えたほうがよいと内心思っている生徒がほとんどであろう。しかし同時に、英語は教科書の中に、そして問題集の中にあり、学校のテストで高得点を取ることが「英語ができる」とことと考える傾向が生徒の間にあるのではないかと思う。テストで点が低い生徒は、英語が苦手、あるいは英語が嫌いという意識を持つようになる。

しかし、英語は生活の中で使われる生きた言語である。歴史を学ぶように英語を学ぶやり方だと、この当たり前のことが生徒の中で意識されにくい。英語教育では、生徒の英語力を高めることまで強く求められている。しかし、「英語が使えない」という意識を持つ生徒の数はなかなか減らない。問題はいろいろあるが、「生徒が『学習者』として英語を学び続ける」という姿勢が大きな要因だと筆者は考える。学習者である限り、英語は「何時か、どこかで、だれかと使えるようになりたい」という憧れの対象であり続け、「今、ここで英語を使う」という実感はなかなか生まれないからである。

文科省は「真に使える英語力」を目指している。しかし、英語を真に使えるようになるためには、英語を「今・ここ」で使うしかない。そのためには「学習者」のままではいけない。学習者であると同時に「表現者」にならなければならないのである。

しかし、「表現者になれ」といわれて、それを実行することはむずかしい。なぜかといえば、これまで英語を使うということを自覚して英語を学んでこなかったからである。筆者は、英語を教科として漠然と学ぶというスタンスではなく、my English を自分で構築

するというスタンスを持つことが必要であると考えている。

英語を母語にする人であれば、言語習得の過程で知らず知らずのうちに、一人ひとりの my English を身につける。それは、英語でのやりとりをするための能力（つまり、英語力）である。日本の英語学習の環境では、my English が自然に育つということは考えにくい。そこで、自覚的に自分の中で息づく my English を構築していく必要があるのである。

my English を構築するには、まず、自分事として英語学習をとらえる必要がある。自分が英語の所有者であるという意識を持つことである。そして、「学んだら使う、使ったら学ぶ」という《learn ↔ use》を実践することである。そのためには、英語表現を「知識の箱」の中に閉じ込めるのではなく、現実世界と関わらせることである。“authentic”な英語に触れることである。

筆者は学生の頃、「与える」という意味と John gave Mary a book. のような用例をセットとして give を理解し、それを知識の箱にしまっていた。しかし、ある日、“Give us 22 minutes. We'll give you the world.”（22分ください。世界をお見せしましょう）という表現に触れた。その瞬間、give が現実世界とつながり、筆者の my English の1つになったのである。

持続的に英語にふれ、使うためには、「英語の日常化」を実践することが不可欠である。日常的に生の英語にふれ、英語をなんらかの形で使うことで、英語は自分のことばとして機能を高めていくのである。

（たなか しげのり・慶應義塾大学教授）